
リリカルマジカルハードモード

煉瓦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルマジカルハードモード

【Nコード】

N3318BA

【作者名】

煉瓦

【あらすじ】

魔法少女リリカルなのはとか言う世界に転生させられた俺。女神に告白されるし敵は魔法少女ものとは思えないぐらい強い姉は過保護？だし……。俺はこれからどうなるの！？

ブログ 気がついたら女神に告白されていました(前書き)

つい衝動的に書いてしまった

これからは両方更新していこうと思う。

プロローグ 気がついたら女神に告白していました

気がついたら知らない天井だった。
テンプレか……

「君、失礼な事考えたよね今」

目の前には金髪の女性が、所謂女神だと思うがいた。

「まあ、いいわ。分かっていると思うけどここ死後の世界みたいなものだから」

神のミスってやつか？

「はあ？ 神様がそんな簡単にミスするとても思っているわけ？ バカなの？」

ちょっとイラッと来た。

じゃあ、なんなんだよ？

「そんな事もわからないの？ 普通に事故死して来たに決まっているじゃない」

どうやらこれが普通らしい。

「まあ、あんたは特別だけど！」

特別なんかい！

じゃあ、俺はこれからどうなるんだ？

「テンプレに転生してもらおうわ！ 暇だから！」

やっぱりテンプレかい！

「まあ、あなた以外にも何人か前にミスって殺しちゃった人よんだけどね。テヘツ☆」

テヘツ☆じゃねーよ。やっぱりミス多いんじゃないか。

「まあ、特典寄越せとか煩かったから虫になれる能力とか、女性の下着を被ったら強くなる能力とか適当にあげたけど。貴方もいる？」

そんな変な能力いらねーよ！

「まあ、なんて無欲な人間。うん。顔とか好みだから色々強いのがげちゃう。あ、私の処女とかもいる？」

いらないよ？ 急に何言い出すんだよ！

「ケチ。ヘタレ。童貞。男好き」

最後のは否定させてもらおうか？

「私貴方に恋しちゃったの。好き。抱いて！」

そう言うのと女神は急に抱きついて来た。
まあ、華麗に避けるんですがね。

「キャウン。痛い……」

事項自得だな。

というより特典とかいらないんだが。

「え、もう移し終えたけど……」

はあ？　いつだよ？

「うーん。処女貰ってぐらいから？」

速攻で終わらしてますね！

「まあまあそう怒らずに。そうだ特典の説明してあげる」

まあ、貰ったからには説明を受けておくよ。

「じゃあ、その1。まず君が行く世界は魔法少女リリカルなのはって世界だから、ミッドの魔法とベルカの魔法を使える様にしよう」

リリカルなのは？　あんまり知らないな。高町なのはってのが魔王でフェイトが百合。はやてがおっぱい魔神でシグナムがニート侍でヴィータがエターナルロリータぐらいしか知らないな。
あれ、以外と知ってる？

「うん。色々間違ってるね。じゃあその2。直感力みたいなのが優れてる。だから武器とかも直感的に操れる！」

へえ。まともだな。

「その3。魔力変換素質「風」。ちなみに風は持つてる人とかいないから「炎熱」とか「電気」みたいに名前が無いんだよね。颯風とか狂颯とかでも好きに呼んで良いよ」

まあ、早い話が風を操れる力？

「じゃあ最後に、相手の技術を吸収し戦えば戦うほど強くなる」

あれ、意外とチートじゃ無い？

「だってチート過ぎると面白くないでしょ？」

面白い面白くないじゃ無いと思うけどな。

「あ、最後にこれをあげる」

そう言って渡して来たのは鎖だった。

「それはね。インテリジェントデバイスって言って魔法の補助装置みたいなものだよ。ちなみに長さとか大きさ変えられるから」

へー。

「ちなみにインテリジェントデバイスには意思が宿ってるんだけどその意思私だから」

は？ どういう事？

「私はここを離れちゃいけないからね。その鎖に私と通信出来る機能をつけてついでに向こうの世界でインテリジェントデバイスって

呼ばれてる物みたいに改造しただけだよ。貴方と片時も離れたく無いから！」

あれか、簡単に言ったら向こうの世界ではインテリジェントデバイスって呼ばれてるけど実は魔法補助してくれる女神か。

「そんなところ。まあ携帯電話みたいな感じ！　ちなみに起動時は色んな武器になるよ。あと名前は私の本名のレイシスだから。気軽にレイって呼んで！」

はあ、面倒だ。

「さあ、転生したらなにをする？　私一応ここから離れちゃいけないけど、その鎖があったら貴方のもとにひとつ飛び出来るよ！」

ひとつ飛びして何する気だよ。

「え、もう……そんな事言わせないでよ……」

ダメだこいつ。早くなんとかしないと。

「あ、ちなみに他の転生者とかには気をつけてね。何人か強めの能力持ってたから」

いや、渡したのはお前だろ？

「気にしない気にしない。さあ、新しい人生を楽しみなさい！」

そう言って俺の足元に黒い穴が開き落とされた。
最後までテンプレだなおい。

ブログ 気がついたら女神に告白されていました（後書き）

てなわけで新連載。

一応もうひとつの方もこれからは更新頻度が上がると思うよ！

ハードモードとか言いながらハードなのはまだ結構先と言う……

あと、間違った原作知識とかは作者にも言えることだと思うから覚ええといてね！

てなわけでこれからよろしくね！

第1話 姉がブラコン過ぎて困る

こんにちは、転生させられた火花紅次だ。ひばなこうじ

ちなみに紅次ってのは俺の名前な。

しかし赤ちゃんからやり直しはやっぱ恥ずかしいな。

まあ、肉体に引っ張られたのか当時はそこまで羞恥心が無かったが
……

今は4歳だ。一つ上の姉がいるんだが……俺の事を愚弟とかよぶく
せにブラコンだ。

風呂は絶対に一緒に寝る時も一緒。常に俺をそばに置いておかなければ落ち着かないらしい。

「あやねえなにしてるの？」

ちなみにあやねえとは姉の事だ。彩花あやかだからあやねえ。

「そんな事もわからないの？ 今貴方のアルバムを整理していると
ころよ」

手元を覗きこめば確かに俺の写真や俺とあやねえが写った写真がズ
ラリと並べられている。

ちなみにこれでアルバムは10冊めになる。

俺は身の危険を感じあやねえからそっと離れる。

幸い姉は写真を見てキヤーキヤー言っているから暫く気付かないだ
ろう。

俺の父と母は管理局とかいうところで働いている。それなりに偉いのかあまり家に帰ってこない。

だからあやねえはブラコンになったのかもしれない。

今更だが俺とあやねえの見た目を軽く説明しよう。

俺は紅い髪の毛を適当に伸ばしている。今は軽く肩にかかるぐらいだ。瞳も紅く目つきが悪くよく人に誤解されやすい。

あやねえは俺と同じ色の髪を腰辺りまで伸ばしていて綺麗だ。瞳も俺と同じで紅い。

けどあやねえは周りに優等生として見られている。実態はブラコンなのに。

ちなみに三歳ぐらいの時に鎖のデバイス？レイシスが首に架かっていた。

あの時はあやねえが「愚弟が不良になった！」とうるさかったな。

さて、現実逃避はやめようか。

「あやねえなにしてるの？」

現在あやねえに腕を掴まれて身動きが出来ません。

てか、気づかれないように離れたのに掴まれるとは。

「どこに行こうとしてたのかな？」

「ちょっとトイレに」

「なら、私も一緒に行くわ」

「あ、もうだいじょうぶかも！」

なぜトイレまでついて来ようとする。

「そう。じゃあこの賢姉と一緒にアルバムを見ましょう」

そう言って後ろから抱きしめて座らされる。

これじゃあ逃げられん。

アルバムって過去の恥ずかしいの見なくちゃいけないから嫌いなんだよな。

とか思いながら2時間ぐらいアルバムを見続けた。

あやねえ。俺が知らない写真がいっぱいあるよ。まさか盗撮？
きつと将来あやねえは変態になると思う。

第2話 地球進出

今日父さんと母さんが死んだ。

任務中に死んだようだ。

俺としてはあまり実感がなかった。あまり一緒にいなかったから。しかしたまに顔を合わせた時は目一杯可愛がってくれる良き両親だった。

さて、今は家にいるのだが困った事になった。

現在俺は4歳あやねえは5歳だ。

つまり後継人みたいなのがいるのだが……。あやねえが周りの大人を威嚇して話が進みません。

どうやらうちの両親は管理局内でもそれなりに階級が高くて金を持っていた様だ。

当然保険金の様な物が凄い額になる。

前世の頃なら一生働かないでも暮らせるぐらいには金があった。

そんな訳で管理局の金の亡者が群がって来た。

「あんたはここでジッとしてなさい」

そう言って俺を別室へと待機させる。

「あやねえ？」

「大丈夫よ。あんたの事は私が守ってあげるから」

そしてあやねえは大人達がいる部屋へと戻って行った。

「なあ、レイ。どうにかならないのか？」

俺は首に架けている鎖のデバイス、レイに話しかける。

『んー。最善策としては一番マシな人を探すとかかな。けどそんな人いなかったしなー』

使えない駄デバイスな女神（笑）だな。

『む。じゃあいいですよ。今からそっちに現界して保護してあげますから！』

「やめろ。それでも神様かよ」

『神様と女神はちがうんですー』

「へえ、どこらへんが？」

『え、能力的な？』

自分でも分からんのかい。

解決策をあーだこーだ言い合っていたらいきなり扉が開いてあやねえが帰ってきた。

「あやねえ？」

あやねえは何処となく安堵の表情を浮かべている。

「こーちゃん。安心して、もう大丈夫だよ」

俺に抱きつきながらそう言ってくる。

ちなみにこーちゃんとは俺の事だ。

こうじだからこーちゃん。愚弟かあんた以外ではこう呼ばれている。しかし大丈夫とはどういう意味だろうか。

「さっきグレアムのおじさんが来て私たちの後継人になってくれるって」

グレアムのおじさん。

本名ギル・グレアム。

地球出身の父さんと母さんと仲が良く、俺たち姉弟は良く使い魔の猫二匹と遊んでいた。

ちなみに俺とあやねえは地球に行った事が無い。

何はともあれ金の亡者の心配はしなくていいだろう。

グレアムのおじさんに任せれば大丈夫だろうし。

後日、俺たちは現在住んでいるミッドから管理外世界、地球に引越すことになった。

なんでももう一人面倒をみている子がいるらしくその子の隣に部屋を用意してくれたらしい。

グレアムのおじさんの使い魔、双子のリーゼロッテとリーゼアリアに手伝ってもらいながら準備を終える。

グレアムのおじさんとロッテとアリアに、見送ってもらいながら地球へと向かった。

そして、俺は地球で出会う事になる。
後のおっぱい魔神と呼ばれる存在と。

第3話 関西少女登場（前書き）

はやての話し方が難しかった……

同じ関西人なのになあ

第3話 関西少女登場

地球に来た俺たち姉弟は取り敢えずグレアムのおじさんが面倒を見ているという子のところに挨拶に来ていた。

「火花紅次です」

「姉の彩花よ」

「八神はやて言います。よろしゅうな」

ohー、原作キャラとかいう奴じゃん。

目の前には茶色髪の女の子。足が不自由なのか車椅子に座っている。一応俺と同じ年らしい。

「はあー、おじさんに話は聞いてたけど、なんや嬉しいな。家族が増えたみたいで」

事前に聞いた話だとはやては昔に両親を亡くしたらしい。だから俺たちの存在とが嬉しいんだと。

「んふふ、はやて？ これからは私の事は姉と思いなさい。この賢姉が貴方を幸せにしてあげる！ だって家族ですもの！」

「お姉ちゃん？」

「ノンノンノン。あやねえ」

とりあえずお姉ちゃんではなくあやねえと呼ぶ様に進めてみる。

「あやねえ……うん。なんかこっちの方がしっくり来る」

それはあやねえと呼ばれて4年目だからな。

互いに自己紹介を終えてからは家に戻り一先ず荷解きをする。
とは言っても服や大事な物ぐらいしか持って来てない。

これはグレアムのおじさんが地球で買えばいい。と言ったからだ。

『ああ、地球という事はただでさえ少ないセリフが更に少なくなる
んですね。わかります』

地球は魔法が無いからな。

しかしレイよ。そんな電波な発言は止めようぜ。

「愚弟ー。はやてがご飯一緒にしようって」

それは好都合。

皿とか食材が全く無いからな、助かる。

「今行くー」

俺はとりあえず返事をしてはやての家へと向かった。

「どう、かな？」

「うん。美味しいよ」

料理は普通にうまかった。

本当に4歳児か？

ちなみに俺は得意料理が卵焼きであやねえが卵かけご飯だ。

おい、それは料理じゃ無いとか言うな。あやねえに潰されるぞ！
ナニがとは言わないが……

「えへへ。良かった。それでも料理は得意やねんで」

確かに得意と言うだけはあった。

肉の焼き加減に野菜のシャキシャキ感の出し方。
スープも味わい深かった。

よし。これからははやてに料理を教わろう。

「それじゃあ、お風呂入るか」

もう8時だ。良い子はもうすぐ寝る時間だな。

「じゃあ、はやて、愚弟行きましょうか」

え？ はやても？

「なあに、その鳩が飛行中に豆鉄砲食らった様な顔は」

「いや、一応俺は男だし、はやては女の子だし」

俺はあやねえと何時も一緒に入ってるから慣れてるが、はやては流

石に恥ずかしいだろう。

「あら、けどはやては足が不自由なのよ？　なのに一人でお風呂に入れと？」

うっ、確かに。

「けど、それならあやねえとはやてだけで入れば」

「ふう、分かってないわね」

あやねえはやれやれと言った雰囲気で肩を竦める。

「そんな事したら私が弟の体を見れないじゃない！」

「お巡りさーん！　変態がいます！」

「私は変態じゃないわ。弟LOVEなだけよ！」

なお悪いよ！

「ふふっ、あははは！」

俺とあやねえが、言い合っているとはやてが突然笑出した。

「どうしたんだ？」

「いや、面白くてついな。仲ええ姉弟やなー」

「はやて……」

「ん？」

「お前もいずれこれぐらい仲が良くなるんだぞ？」

そう言うとはやては間拔けな表情を浮かべる。

おお、これがら鳩が飛行中に豆鉄砲を食らった表情か。

「んふふ。どういう事？　って顔してるわね。簡単よ。私達はもう姉妹なんですよ！」

そう。最初に会った時に言ったようにもう家族なのだから。あれぐらいの掛け合いはこなしてもらわないと。

「そっか……そやな。うん！　ほな関西人の腕の見せ所やな！」

いや、別にギャグするわけじゃねーから！

「ほな、はよお風呂入ろかコウ！」

「ええ？　いいのかよ？」

「ふふん。家族やねんから遠慮はいらんやろ？」

あ、確かに。

これは一本取られたな。

「てか、コウって？」

「ん？　紅次やからコウ。うん、似合ってるで！」

あだ名みたいなのか。

まあ、ゆくゆくはおっぱい魔神とか呼ばれるんだしいいか。

「さて、じゃあ入るかね」

ああ、そういえばレイははやてがいたら喋れないから存在を忘れていたな。

side はやて

今日家にやって来たのは紅髪の姉弟だった。

グレアムおじさんが言うには両親が亡くなって引き取り手がおらんから引き取ったらしい。

紅髪の弟君は髪の毛はボサボサで目付きが鋭くてちょい怖かったけど話してみたらええ子だった。

お姉さんの方は髪の毛は良く手入れされてて目は意思の強そうな目だった。

同じ女の私からみても綺麗で尊敬した。

なんか家族が増えたみたいに感じて言ってみたらお姉さんが姉と思ってくれてええて。正直むっちゃ嬉しかった。

二人ともご飯作る為の食材がなさそうやから夕ご飯を作って上げた。それでも昔から料理はしてたからな、自身はあるで。

うん。われながら上手く出来たと思う。

コウに美味しいって褒められたら嬉しかった。

今までは料理を誰かに振るうなんてせえへんかったから緊張したけどやったかいあったな。

ご飯が終わってさあ、お風呂って時にあやねえが皆で入るいいだった。

私は別に構わへんけどコウが凄い慌ててた。

そこから姉弟での漫才。二人の仲が凄お良くて笑ってもうた。

そしたらコウが急にお前もいずれこれぐらいしろよ。とか言い出した。

なんでやねん。

そしたら、二人が私はもう家族で……。

私が一番欲しかったもの。

二人ともありがとうな。

お風呂に入って今はベッドの中。

二人は布団も用意してなかった。

しょうがないから家族想いな私がベッドに入れて上げた。

三人は流石に狭いけど私は今までの一人やない夜に満足や。

あ、あやねえもう寝てもうた。

「なあ、はやて」

「ん？」

そろそろ寝よかなおもてたらコウが話しかけて来た。

「これからよろしくな」

「んーこちらこそ？」

私は足も不自由やしこっちがお世話になりそうやわ。

「ん、そうか。じゃあおやすみ」

眠りにつこうとしてるコウ。

私は今日の感謝と、これからも迷惑かけるやろからお礼として言うておく。

「大きくなったら結婚しよな」

「ヤダ」

……なんでやねん。

第3話 関西少女登場（後書き）

最初タイトルはおっぱい魔神登場！ とかだった。流石にタイトルがあれすぎたんで変えました

はやてが車椅子に乗ってるのっていつからだろう。

わからないからとりあえず4歳時には乗ってましたと捏造。

車椅子押せるか？

感想とかくれると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3318ba/>

リリカルマジカルハードモード

2012年1月10日05時46分発行